

【試し読み】

新天理図書館善本叢書

第26巻 奈良絵本集 4

(2019年6月刊行・八木書店)

解題

金光桂子・齋藤真麻理・石川透

※本書の詳細は下記サイトをご参照ください。

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/508>

『奈良絵本集四』
解題

金光 桂子
齋藤 真麻理
石川 透

あま物語

装訂 袋綴 上下二冊

表紙 蘆辺に落雁を描く。中央に題簽の剝落した跡がある。

料紙 鳥の子紙

法量 縦一六・二cm×横二三・七cm

外題等 外題、内題、奥書、識語等なし。

墨付 上冊十七丁半、下冊二十一丁。

行数 十二行×十五行

字高 約一三・九cm

挿絵 上冊半丁五図、見開一図。下冊半丁四図、見開三図。

書写年次 〔江戸時代初期〕写

(請求記号九一三・五一イ二九)

本書は題簽が剝落しており、題名を示すものがないが、清水泰氏によって紹介されたように、⁽¹⁾同氏所蔵の「あま物語」と題する奈良絵本と内容が一致することから、その名で呼ばれるようになったものである。

この物語は、都の貴公子と難波の海人の娘との恋を描くもので、身分違いゆえ必然的にもたらされる別離から、女の自死、転生、再会と展開してゆく点に特徴がある。まず、物語の梗概を記しておく。⁽²⁾

(上冊)左近中将平兼光は、行幸の供をした際に落馬して腰を痛め、摂津国の難波の浦へ湯治に赴く。兼光をもてなすために集められた海人たちの中に、十五六歳の美しい娘がいた。その海人の奥ゆかしい態度に惹かれた兼光は、「このみ」という侍に後をつけさせる。このみは海人と和歌のやり取りをしたことを報告する。兼光は日が暮れてから再びこのみを遣わし、海人を連れて来させる。身分の違いから当初は兼光の言葉を信用しなかった海人も、やがて心を開き、互いに浅からぬ仲となる。その後、兼光に帰京の宣旨が下る。兼光は海人との別れを惜しみ、自らの小袖などを与える。出立の前夜、海人は秘かに自分の家に帰る。兼光は帰京してからも海人のことを思い続け、北の方とは疎遠になる。北の方はこのみを呼んで事情を問いたです。一方、難波の海人は、形見の小袖を手に泣き悲しむ日々を送るうちに、懐妊五箇月になっていた。生まれた子が海人の子と蔑まれることを恐れた海人は、出産前に自ら命を絶つことを決意する。

(下冊)八月十五夜、海人は兼光との再会を祈念しつつ、海に身を投げて自害する。海人の入水を暗示する夢を見た兼光は、このみに衣二百枚を持たせて難波に行かせる。このみは海人の両親から事情を聞き、供養のためにと衣を与える。このみの報告を受けた兼光は、悲しみの涙を抑えられない。その頃、右大臣の北の方が、「ただの海」の鯛を所望し、食べた後に姫君を出産する。年月が経ち、美しく成長した姫君に後の宣旨が下るが、姫君は兼光との間に深い契りがあることを思い、喜ばない。姫君入内の日、風で御簾が吹き上げられた隙に、姫君の姿を見た兼光は、たちまち心を奪われる。姫君は急に胸を病み、入内は中止となる。

その後、兼光は姫君との結婚を許され、二人の間には男児・女兒が相次いで生まれる。なぜか昔のことを知っているらしい姫君の言動を不審に思う兼光に、姫君は難波での出来事を記した絵草紙を見せ、自らこそ海人の生まれ変わりであると打ち明ける。兼光は、海人のような女性との再会を願ってきたかいた喜び、海人の両親にも位と所領を賜る。その後、夫婦は豊かに暮らして長寿を保ち、女兒も入内して皇子を産んだ。

本書の異本として、天理図書館の所蔵になる、延宝二年（一六七四）の書写奥書を有する写本一冊（外題「海土物語」）が知られている。本書と延宝写本との内容上の違いについては、今西實氏の先行研究に詳しい³⁾。両者とも全体の筋立てはほぼ一致するものの、延宝写本には、海人の入水のきっかけとして撰津国の国司から求婚されるという独自の趣向があり、また、海人を玉津島明神の申し子とし、海人の転生には住吉明神の靈験が関わるなど、宗教的性格も色濃く見られる。概ね延宝写本の方が後代的要素が強いと考えられている。

さて、清水氏によって本書が紹介された時から指摘されているように、この物語の淵源は平安時代にまで遡る。『宝物集』『和歌色葉』『八雲御抄』といった平安末期から鎌倉初期にかけての文献や、鎌倉中期に編まれた物語歌撰集『風葉和歌集』などから、「あま入」乃至「あま」「あまの物語」という名の散逸物語の存在が知られ、それを改作したものが、現存する『あま物語』だと推定されるのである。

特に『宝物集』（新日本古典文学大系）に「アマノ物語」の内容として記された、「ナニハノ浦ノアマハ、十六年ト云ニ、願ノ力ニ依テ、兼光ノ少将ノ妻トナリタリ」は、人名を含め本書のあらすじとほぼ一致する。『風葉和歌集』（新編国歌大観）に「あま入のむすめ」の歌として載る、「なにはわたりにて見あひける人の、宿をとひはべりければよめる／白浪のよするなぎさに世をへつつあまのこなれば宿も定めず」は、本書では、兼光の命により後をつけてきたこのみに対して海人が詠んだ歌として見え（第三句「よをすぐす」）、詠歌状況も『風葉和歌集』の詞書と矛盾しない。現存『あま物語』が、少なくとも平安末期には成立していた散逸物語「あま入」と、極めて密接な関係にあることは間違いない。

一方で現存『あま物語』には、他の中世の物語と共通する要素も見られる。やはり清水氏以来、諸氏の指摘するところであるが、たとえば物語の冒頭で、主人公が落馬して負傷し湯治に赴くという設定は、中世王朝物語『木幡の時雨』や室町物語『岩屋の草子』にも見られる、一つの典型である。特に『岩屋の草子』とは、都の貴公子が海人の住処で美しい女性を見そめる点、後にその女性を育てた海人夫婦に報いる点なども共通しており、関係の深さが窺われる。ただし、現存する『岩屋の草子』もまた、散逸した平安朝の物語の改作と考えられている。現存『あま物語』が中世以降の改作であることは文体などから明らかであるが、内容の上では平安時代の物語の原型を引き継ぐところが大きいのであろう⁵⁾。

本書のもう一つの特徴は、全五十首と、物語の分量の割には極めて多くの和歌が含まれることである。特に上冊では、兼光と海人、あるいはこのみと海人との間の和歌の応酬が繰り返し記されており、歌物語のような印象を与えるほどである。その中には、兼光が海人の教養を試そうとして、

しらなみのよするなぎさにすむあまははまのまさごのかずやしるらんと問いかけたのに対し、海人が、

君はまたくものうへなるすまひしてそらなるほしのかずをしれるや

と返したため感心する、という機知に富んだやり取りもある(上・八丁裏)。「浜の真砂」と「空なる星」とを数え切れないものの代表として並べることは、『後拾遺和歌集』恋四部の配列(七九六番・七九七番)にも見られるが、本書ではこの贈答のすぐ後に、

ことほりや我はくもゐのうへにすむあまなれやいかゝたのまん(兼光、上・九丁表)

という歌もある。「海人」と「天人」(雲上人である兼光自身)というかけ離れたものが同音であることを利用した歌である。こうした発想を踏まえれば、先の兼光と海人とのやり取りもいっそうおもしろみを増すであろう。一方下冊に入ると、特に海人が転生した後の物語では和歌の数自体が少なくなる上、類型的な詠みぶりが多くなるように思われる。

次に、本書の写本・奈良絵本としての特徴を述べると、まず上冊の十七丁表から裏にかけて、一見長歌のように、上下二段に分けて歌の文句の連ねられているところがある。兼光との別離を嘆く海人の歌であるが、実際は長歌ではなく五・七・五・七・七の繰り返しであって、短歌形式の和歌が九首並んでいるということになる。

室町物語には長歌の登場する作品がいくつかあるが、特に『あま物語』と同じく王朝物語の流れを引き継ぐ公家物の作品では、不幸な境遇にある女主人公の哀切な思いを長歌に託すという、一つの典型があった。『伏屋の物語』『桜の中将(小伏見物語)』などがそうである。これらの作品に影響を与えたと思われる『住吉物語』でも、継母に迫害され難波の住吉まで落ちのびた姫君が長歌を詠んでいる。本書が九首の和歌をあえて長歌のような形式で書き連ねているのは、そうした典型を意識したものであろうか。

それ以外にも、本書はかなり自由な態度で筆写されているという印象を受けるところがある。一面の行数は一定せず、十三行か十四行であることが多いが、十二行や十五行の面も散見する。本文が挿絵の面に割り込むこともあれば、挿絵直前の丁の紙幅に余裕がある場合は大胆な散らし書きを行うこともある。奈良絵本が量産化される以前の、規格にとられない姿をとどめる本といえよう。挿絵も見開きの図が計四図あり、海辺の光景などがゆったりと描かれている。

なお本書の現状の装訂は、上下二箇所につづつ穴を空けて綴じる、結び綴(大和綴)となっているが、これは改装されたものである。本文料紙には現在の綴じ穴以外にも穴が残っており、本来はより一般的な四つ目綴の装訂であったと思われる。

(金光桂子)

【注】

- (1) 清水泰「あま物語に就いて」(『国語国文』八一―、一九三八年一月)。ただし、清水氏所蔵本は上冊を欠く一冊本。
- (2) 本書の本文は、『室町時代物語大成』一(角川書店、一九七三年)に翻刻されている。
- (3) 今西實「『海土物語』(天理図書館蔵写本)について」(『山辺道』一七、一九七二年三月)。
- (4) 三角洋一氏は、「白浪の」歌に由来する「あまの子なれば」という表現の広がりや、転生によって男女が結ばれるという話型から、散逸物語「あまの」の成立は『源氏物語』以前に遡るかという見通しを述べている(中世文学研究叢書『物語の変貌』若草書房、一九九六年)。
- (5) 『あま物語』と『岩屋の草子』との影響関係については、三角氏が詳しく論じている(前掲注(4))。

大古久まい

装訂 綴葉装 二冊

表紙 亀甲地に鶴の丸文様を散らした鼠色金欄表紙。見返しは布目地金紙。

料紙 鳥の子紙

法量 縦二三・五cm×横一七・〇cm

外題等 上冊左肩、金泥下絵題簽に「大古久まい上」と墨書。下冊は左肩に題簽剝落跡。内題、奥書、識語等はない。

墨付 上冊十七丁、下冊十五丁。

行数 十行

字高 一八・二cm

挿絵 上冊半丁六図。下冊半丁四図、見開一図。

書写年代 〔江戸時代前期〕写。

備考 挿絵丁のウラに作品名と掲出順を墨書する。上冊、第一図「上ノ壺」(3ウ)、第二図「大黒まひ上ノ式」(8オ)、第三図「大黒まひ上ノ三」(11ウ)、第四図「大こくまひ上ノ四」(13オ)、第五図「大こくまひ上ノ五」(14ウ)、第六図「大こくまひ上ノ六」(16オ)。下冊、第一図「大こくまひ下ノ壺」(3ウ4オの見開き図。3ウのウラに墨書)、第二図「大こくまひ下ノ式」(7ウ)、第三図「大こくまひ下ノ三」(9ウ)、第四図「大こくまひ下ノ四」(12ウ)、第五図「大こくまひ下ノ五終」(15オ)。

下冊は1ウのあとに、本来7オ・ウに置かれるべき本文が誤入されているため、1ウから2オ、6ウから7オの丁が改まる箇所で文意が通じない。また、3ウと4オは見開き(挿絵)で折りの外側の面を貼り合わせ、もとの括りの中に貼り込んでおり、3ウが貼り付けられた一葉は、2ウ3オが谷折りになるように綴じ込まれている。この谷折りを山折りとして折り返せば、2ウが8オの前に来るようになり、正しい順となる。これらのことから、本書はまず本文と絵が別個に用意され、綴葉装として綴じた際に順番になるよう割り付けがなされ、それによって料紙への書写と絵の貼り付けが行なわれたものの、見開きの挿絵が貼り込まれたことが影響して、乱れが生じたと思われる。いずれにせよ、こうした事例からは綴葉装の複雑な工程が窺え、延いてはそのような装訂を選択した企図を含めて、奈良絵本制作の実態を考察する材料となろう。

(請求記号九一三・五―イ三七七)

中近世日本における福神信仰の隆盛を受けて、室町物語においても福神たちはめざましい活躍ぶりを発揮した。『大黒舞』(別名『大悦物語』)はその代表的な作品の一つであり、夙に平出鏗二郎『近古小説解題』(大日本図書株式会社、一九〇九年)において梗概が紹介され、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』、三省堂、一九八二年)には六本の伝本が報告された。以後、伝本の発掘に加え、福神信仰や芸能文化を起点に成立背景が論じられる一方、『梅津長者物語』『隠れ里』『酒の泉』等、濃厚な福神信仰や、孝行譚を語る室町物語との関連性について論及がなされ、注釈も公刊された(後出諸本(四))。本作の盗賊・修羅の来襲場面に『太平記』卷二十三「大森彦七事」が利用されたことも、成立事情を考える上で重要である⁽¹⁾。総じて物語構成に大異はなく、各系統の伝本間で本文が大略一致する点から見て、多く

は江戸時代前期頃、絵草紙屋で制作されたと推測される。⁽²⁾めでたき詞章に満ちた本作は正月の吉書として歓迎されたと思しく、現存諸本は美麗な絵巻や絵本に仕立てられている。以下、主要伝本を物語内容から二系統に大別して示す（括弧内は収録刊行書）。

第一系統

- (一) 本書Ⅱ天理図書館本 二冊（今西實「翻刻解題『大古久まい』『山辺道』」一八、天理大学国語国文学会、一九七四年三月）
- (二) 鎌倉英勝寺本 絵巻二軸（木村千鶴子「英勝寺蔵本『大黒舞』について」『鎌倉』二八、一九七七年三月。『甦る絵巻・絵本 鎌倉英勝寺所蔵 大黒舞絵巻』木村千鶴子・八木意知男解説、小林祥次郎釈文、方蘭・吉田宏美・前原由幸英訳、勉誠出版、二〇〇六年）
- (三) 蓬左文庫本 二冊（一部に欠落あり。題簽「大黒舞 上（下）」。『室町時代物語集』五、井上書房、一九六二年⁽³⁾）
- (四) 国文学研究資料館本 絵巻二軸（題簽「大こくまひ上（下）」。新日本古典文学大系『室町物語集』下、徳田和夫校注、岩波書店、一九九二年。国文学研究資料館新日本古典籍総合データベースより全文画像を公開。https://doi.org/10.20730/200006198）
- (五) 所在未詳 絵巻二軸（題簽「大えつの上（下）」。『弘文荘待賈古書目』三六、一九六九年一二月。今西實「翻刻解題『大古久まい』『山辺道』」一八、天理大学国語国文学会、一九七四年三月）
- (六) 国立国会図書館本 絵巻二軸（赤木文庫旧蔵。題簽「大えつ」（上巻）。『室町時代物語大成』八、角川書店、一九八〇年。国立国会図書館デジタルコレクションより全文画像を公開。https://doi.org/10.11501/1287507）
- (七) 青山学院大学本 絵巻二軸（塩川和広「資料紹介―青山学院大学図書館蔵『恵比寿大黒絵巻』」『立教大学大学院日本文学論叢』一四、二〇一四年九月）
- (八) 東海大学本 二冊（蔵書印「英王堂蔵書」。上巻に識語「飛鳥井權中納言雅豊卿真蹟也 正徳二年七月廿二日薨時二四十九」、印記「古一」。「大黒舞二冊 飛鳥井中納言雅豊卿正筆 左仲翁鑑定札」の紙片貼付。箱書「奈良繪本 大黒舞」）
- (九) 瀬沼寿雄本 横本二冊（松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」所載）

第二系統

- (一) もりおか歴史文化館本 絵巻二軸（旧盛岡市郷土史料館本。伊藤博夫「資料―『大悦物語』の一異本」『盛岡短期大学研究報告』二〇、一九六九年一〇月⁽⁴⁾）
- (二) 島根県立古代出雲歴史博物館本 絵巻二軸（同館特集展「じっくり味わう『絵巻』」二〇一五年六月。『島根県立古代出雲歴史博物館展示ガイド』、二〇一六年二月⁽⁵⁾）
- (三) 佛教大学本 絵巻二軸（題簽「大こくまひす 上（下）」。佛教大学図書館 Digital Collections より全文画像を公開）

このほか、白方勝・田村憲治「『異本大悦物語』（仮題）」『愛媛国文研究』三六、一九八六年二月）に愛媛県下の個人蔵の絵巻二軸（端本。以下、愛媛本）が紹介され、文中の人名や地名から瀬戸内海ゆかりの作と考えられている。しかし、脱落や錯簡の多さを考慮しても、愛媛本には老親が登場せず、物語の主題は孝心の徳ではなく、福神信仰に絞られている。また、藁しべ長者譚を欠き、盗賊来襲の場面に大森彦七譚の行文を踏まえ、主人公たちの宮中参内も語らないなど、『大黒

舞』との懸隔を感じさせる要素が多い。他方、主人公が初めから妻帯している点や、福神の真の姿を見て「御ふたのゑさうにすこしもたかひ給はさりけり」と崇めるくだりなどは、貧しい夫婦が恵比寿を信仰し、その像を得て富貴となる『梅津長者物語』を連想させる。抑も愛媛本の大黒と恵比寿は「まれびと」として主人公宅を訪れ、盗賊退治の後、主人公夫婦に乞われて正体を明かすのであり、主人公の名も広島の「磯の太夫」という。従って、愛媛本は『大黒舞』の享受と展開の諸相を考究する上で貴重な作例であるが、今は別本として扱い、右の二系統に絞って考察を進めたい。なお、愛媛本と同趣の作に藤井隆氏蔵『ゑびす大黒』がある（絵巻二軸。未公刊。『藤井文庫 物語の古筆と奈良絵本』、春日井市道風記念館、二〇〇八年。注（3）展示図録）。まずは第一系統の天理図書館本により梗概を示す。

（上冊）吉野の里に住む貧しい「大ゑつのすけ」は、漢の文帝や大舜にも劣らぬ孝行者であった。老親を養うために毎日山で薪を伐り、親も大ゑつを愛おしんで、雨が降れば蓑笠を持って彼を迎えに行くのであった（挿絵1）。ある日、大ゑつが清水寺へ参詣すると、観音は老僧と現じ、一のきざはしに落ちている藁しべを持ち帰れと告げる。藁しべを手に、都見物かたがた子安地藏へ参ると、ありの実（梨）売りが鼻血に難儀している。藁しべで小指を結ぶと血は止まり、大ゑつは礼に梨を三つもらう。三年坂では内裏の女房らしき貴女が喉の渴きに苦しんでおり、大ゑつは梨を差し上げ、礼に絹二疋をもらう（挿絵2）。三条の橋詰めでは馬が突然倒れ、主君から後始末を命じられた従者が困惑していた。大ゑつは馬を絹一疋と交換、忽ち馬は回復し、黄金百枚で売れた。帰郷した大ゑつは家を建て、孝行を尽くす。正月、孝心に感じた大黒が訪れ、大ゑつに宝物を授ける（挿絵3）。その節分の夜に鬼が来るが、大黒が豆まきを伝授し、事なきを得た（挿絵4）。まもなく恵比寿も訪れ（挿絵5）、福神たちは歌舞に興じる（挿絵6）。

（下冊）明けて正月二日、一同は俳諧や相撲を楽しんだ（挿絵7）。大ゑつは福神の加護を得てさらに富貴の身となるが、それを知った大江山の盗賊が来襲する。勇猛な郎等の働きと、福神の加勢によって賊は退散したものの（挿絵8）、後日、彼らは修羅に変じて襲いかかる（挿絵9）。大黒の勧めで大般若経が読誦され、盗賊は極楽往生を遂げた。噂は叡聞に達し、親子は宮中に召され、大ゑつは吉田某清宗の名を頂き（挿絵10）、壬生中納言の姫君と結婚、五人の子宝に恵まれてますます繁盛した。大黒は大黒舞を舞い、一族の繁栄を言祝いだといふ（挿絵11）。

以下、本文の特徴について、第一系統は天理図書館本、第二系統は佛教学本により例示する。第一の特徴として、第二系統の本文は、地名の表記をやや詳しく記す傾向が見られる。たとえば第一系統は大ゑつの在所を「よしの、さと」とのみ記すが、第二系統は「五きないやまどの国よしの、さと」とし、清水参詣の場面では、第一系統は「あるとききよみつに参りて」、第二系統は「みやこにのほり、ひかしやませいすいしにまいり」と書き起す。

第二に、第二系統はより祝言性・芸能性の高い表現を用いる傾向が認められる。たとえば上冊末、大黒が訪れる場面では、第一系統が「そのとしもくれ、あらたまるはるにもなれは」と簡潔に記す一方、第二系統は「そのとしもくれ、あらたまのとしたちかへり、うくひすもおりしりかほになきいて、みやまのゆきもとけ、よものそらにはかすみたなひき、心ものとかなるおりふし」と穏やかな新春を言祝ぐ気分を強調する。続く恵比寿の歌舞では、第一系統では恵比寿は「た

いをはつたとうちあけ」て舞い、天理図書館本では右手で扇と鯛をかざす挿絵が添えられる（一〇六頁）。恵比寿を象徴する鯛を、そのまま歌舞の姿に活かす素朴な趣向が楽しい。対して第二系統の恵比寿は鯛ではなく、「和歌をはつたとあけたまふ」。「和歌をあげる」とは舞に付随する謡物を高音で謡うこと、祝言性を有する表現である。一端を大蔵流狂言に拾えば、「めでたい和歌をあげて舞くだりにいたせ」（虎明本「三人夫」）、「急で和歌を上さしめ」（虎寛本「餅酒」）、「只戻る処ではない。急で和歌を上て戻らう」（同「連歌盗人」）等、祝言の歌を謡いながら締め括る例が散見する。もとより『大黒舞』は芸能と由縁の室町物語であるが、このように芸能性を帯びた語彙が選ばれていることは注意される。

大黒と恵比寿の相撲場⁶⁾面では、第二系統に具体的な技の名が記され、「たかひにゑたること、しきのはかへし、なみく、り、かものいれくひなどいふ手をくたきてとりたまひける」とある。実際、「鴨の羽返し」「鴨の入れ首」は組手の名であり、「組手を図解した本格的な相撲絵巻の最古の史料」「寛永年中の年紀が明確な画証」と評される天理図書館蔵『相撲行司絵巻』（天理図書館善本叢書七二―『古道集二』、熊倉功夫解題、八木書店、一九八六年）等に見える。第二系統の本文は相撲流行の時代相を反映し、これらの語句を加えたのであろう。そこには『相撲行司絵巻』冒頭部分に引く和歌「おさまりてなを有かたき御代なれば此もろともにすまふたしなむ」と通ずる雰囲気も感じられる。付言すれば、「鴨の羽返し」は舞の手の名称としても用いられており（『日葡辞書』「Xiguno fagayexi」項）、幸若「夢合せ」には「貴僧承て、御前をづんど立て、鴨が入首、鴨の羽返し、さつとさひて祝ひの和歌をぞ上げにける」（新日本古典文学大系『舞の本』、岩波書店、一九九四年）という。『大黒舞』の成立をめぐることは、こうした芸能の詞章との交渉も視野に入れる必要がある。

このほか、比較的大きな異同は、藁しべ長者譚に相当する部分をはじめ、盗賊や勇猛な郎等の人名、俳諧の句、末尾の大廻つ親子の年齢、大廻つの子息たちの官職名等に認められる。第二系統では、鬼は蓬莱島から来るとも語っている。紙幅の都合により藁しべ長者譚のみ示すと、藁しべは「一のきさはし」（第一系統）、「さいもんものきさはし」（第二系統）にあり、口渴の女とはそれぞれ「三年さか」「やさかのあたり」で出会う。女は「見もならはぬこし」「あしろのこし」に乗っていた。馬を手に入れたのは「三てうのはしのつめ」「三てうのはしをわたりければ」、馬の代は「わうこん百まい」（諸本は三まい）、「わうこん十りやう」であった。第二系統の本文は大悦の孝子ぶりを喩えて「閔子騫」を引き、俳諧の読みぶりなどからも、時代が下る印象を受ける。

最後に天理図書館本の挿絵について触れておく。その数や場面選択、絵画化された要素は国文学研究資料館本とよく一致する。しかし、第三図（一〇二頁）は本文に反し、大廻つではなく両親に隠れ蓑が呈上されており、第四図（一〇三頁）ともども、一見、どの人物が大廻つなのか判然としない。理由を絵草紙屋の疎放に求めることはたやすいが、それでもなお、計十一図のうち八図にわたり、とりわけ福神来訪と末繁盛の場面に集中して、両親の姿が描き込まれた意味を一考してみる余地はあろう。睦まじげな夫婦の、それも共白髪の様子は幸福と長寿の象徴である。繰り返して描かれたその姿に、『大黒舞』という作品の祝言性を、改めて垣間見ることができるのではなからうか。

（齋藤真麻理）

【注】

（1）佐竹昭広『下剋上の文学』（筑摩書房、一九六七年。のち『佐竹昭広集』四、岩波書店、二〇〇九

年に収録)、金井清光「福神狂言の形成」(『中世文学の研究』、東京大学出版会、一九七二年)、新日本古典文学大系『室町物語集』下(徳田和夫校注『大黒舞』、岩波書店、一九九二年)、渡辺匡一『大黒舞』試論―祝儀物の構造と天皇―(『国文学研究』一一一、一九九三年一〇月)、美濃部重克「風流としてのお伽草子テキスト」『大黒舞』・『ものくさ太郎』(『国文学 解釈と教材の研究』三九―一、一九九四年一月)、真下美弥子「福神来訪の物語の方法―お伽草子『大黒舞』『梅津長者物語』を中心に―」(『立命館文学』五五二、一九九八年一月)、沢井耐三「御伽草子にみる「富」について」(『国語と国文学』七七―七、二〇〇〇年七月。のち『室町物語研究 絵巻・絵本への文学的アプローチ』、三弥井書店、二〇一二年に収録)など参照。なお、『大黒舞』の修羅来襲の挿絵は、天理図書館本をはじめ、複数の伝本が寛文頃刊無刊記・平仮名絵入り『太平記』巻二十三「大森彦七か事」と近似し、黒雲に乗じた鬼が大糸つ邸の上に描かれる。

(2) 石川透『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、二〇〇三年)は、国文学研究資料館本の詞書筆者を朝倉重賢とする。

(3) 尾張藩六世継友夫人安己(光雲院)の愛蔵本。『蓬左文庫図録』(一九九〇年一〇月、第三版)、『絵で楽しむ日本むかし話 お伽草子と絵本の世界』(徳川美術館、二〇〇六年)など参照。

(4) 二〇一一年、盛岡市中央公民館より、もりおか歴史文化館に移管。同館福島茜氏のご教示による。

(5) やや制作時期は新しいが、もりおか歴史文化館本と共通する挿絵を含む。本書で特徴的なのは、恵比寿を若い貴公子風に描く点である。「若えびす」の語からの連想か。修羅との合戦場面では大黒は三面で白鼠に乗る。

(6) 福神の相撲の挙措は、国文学研究資料館本と佛教大学本とで酷似する。なお、国会図書館本の挿絵は独自性が強く、第一図に大舜に因む二十四孝図、第二図には清水寺で藁しべを護る鬼神の姿を描き、第一〇図には大黒天が俵の鞍を付けた白鼠に騎乗し、疾走するさまを活写する。その姿は『弘文荘待賈古書目』三六(一九六九年一月)所載の『大えつのすけ』の挿絵に近い。

【附記】

貴重な資料の閲覧をご許可下さいました蓬左文庫、青山学院大学図書館、東海大学付属図書館、もりおか歴史文化館、島根県立古代出雲歴史博物館、佛教大学附属図書館に御礼申し上げます。

磯崎物語

装訂 袋綴 二冊

表紙 紺色表紙。見返し銀紙巾繫ぎに菱模様。

料紙 間似合紙

法量 縦一六・八cm×横二四・四cm

外題等 中央朱地金泥秋草模様題簽に「いそさき物語上(下)」と墨書。内題なし。

墨付 上冊二十一丁、下冊二十一丁。

行数 十二行(一部、十一、十三行の丁あり)

字高 約一二・三cm

挿絵 上冊半丁六図、下冊半丁六図。

印記 「月明荘」

書写年代 (江戸時代前期) 写

(請求記号 九一三・五一・一五)

『磯崎物語』は、一般的には御伽草子『磯崎』と呼ばれる作品である。『磯崎』の諸伝本は、松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年)の「磯崎」によれば、大きく二つの系統に分かれる。松本は、最も原初的なデンバー美術館本や慶應義塾図書館大型横本等を第一系統(甲類)とし、それより後の成立と考えられる本書『磯崎物語』(以下、天理本)を含む系統を第二系統(乙類)としている。御伽草子として縦型の版本も作られているが、伝本の形として最も多いのは、天理本と同じく、横型の奈良絵本である。近年、『磯崎』の横型奈良絵本が次々と出現しており、江戸時代前期を中心に、この形の『磯崎』に多くの需要があったことが分かる。

本作品の題名は、「磯崎」とするものが最も多いが、石川透蔵A本は外題・内題はないものの、複数の挿絵の裏に「かねまささうし」と墨書されており(『室町物語影印叢刊』三、三弥井書店、二〇〇一年)、「鐘巻き草紙」といった題名であったと推定できる。ただし、これは、本叢書『奈良絵本集』三に所収『ひだか川』等の別名と考えた方がよい。いわゆる『道成寺縁起』の内容を含む『磯崎』を、誤って『道成寺縁起』類と同じ名前にしてしまったものと考えられる。

ここで、天理本を含む『磯崎』第二系統本(乙類本)の概略を見てみよう。

(上冊)この世は夢の中の夢のようなものであって、誰が百年の年齢を保てるであろうか。万事は皆虚しく、常なる物はない。下野国日光山の麓に磯崎殿という侍がいた。頼朝の時に、領地争いが起き、鎌倉へ行っていた。そこで、別の女房を見付けて、日光へ下り、堀の外に住まわせた。本来の女房(本妻)は、磯崎殿を責めるが、光源氏、在原業平の例を出し、よくあることだと本妻を慰める。あるとき、磯崎殿が鎌倉へ向かうと、本妻は新しい女房(新妻)を脅してやろうと、猿楽師から鬼の面と赤頭を借りて、新妻の元へ訪れる。のぞき見ると、新妻の美しさやその会話にますます腹が立ち、障子を破って中に入り、杖で叩くと、新妻は死んでしまう。本妻は家に帰り、面を取ろうとするが、取ることができない。姿が鬼になると、心も鬼になって、人間を食べたくなる。この本妻には男の子がおり、稚児として、日光

山で学んでいた。稚児はこの話を聞き、急ぎ里へ下ると、鬼となった母と出会う。

(下冊) 稚児は、鬼となった母に仏の教えを説き、さらには、同じように妬みによって蛇体となった女の話をし、憎む心を取り除き、一念に菩提心を抱けば、面は取れると話す。その通りにすると、鬼の面と杖は取れたが、自分が殺した新妻のために、出家して菩提を祈る。磯崎殿も、責任を感じ出家する。さて、磯崎殿の本妻に限らず、人を妬み憎むと、鬼とも蛇ともなるものである。昔、まなこの庄司の娘が、熊野詣での山伏に思いをかけ、逃げる山伏を追って、鐘巻寺までたどり着く。娘はにわかには大蛇となり、山伏も自分も奈落に沈む。これらのことをよくよく考えて、人を哀れみ、妬むことのないようにすべきである。

一読して、とても面白い話であるので、『磯崎』の内容については、古くからの研究歴がある。特に、嫉妬から新妻を妬む後妻(うわなり)打ちや、鬼の面が離れなくなる肉付き面の話は、民俗学的な研究に良く利用されている。それらを踏まえた特出すべき研究としては、美濃部重克『中世伝承文学の諸相』(和泉書院、一九八八年)と、沢井耐三『室町物語研究 絵巻・絵本への文学的アプローチ』(三弥井書店、二〇一二年)がある。また、『磯崎』は、渡浩一により、『室町物語草子集』(『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇二年)に、詳細な注釈と現代語訳が付された積文が収載されている。

ところで、天理本の概略は、第一系統本もほぼ同じである。「増訂室町時代物語類現存本簡明目錄」における、第一系統と第二系統の違いは、細かい本文の表現の違いがあるかどうかという程度であるから、研究者によっては、『磯崎』は、全て同じ系統に入れる場合もある。

その本文上の違いを既に翻刻紹介されている、以下の三つの伝本と比較してみよう。

慶應義塾図書館蔵大型本 特大横型奈良絵本二冊(第一系統) (『室町時代物語大成』補遺一)

慶應義塾図書館蔵赤木旧蔵本 横型奈良絵本二冊(第二系統) (『室町時代物語大成』二)

石川透蔵A本 横型奈良絵本二冊(第二系統) (『古典資料研究』五)

いずれの翻刻も、以下の引用では、私に句読点を付している。

最初に、それぞれの冒頭を列挙してみると、次の通りである。

慶應大型本

それ、一しやうは、夢のうちのゆめ、たれか、はくねんのよはひを、たもたん。はんしはみなむなし、いつれか、しやうちうの、おもひをなさん。

慶應赤木本

それ、二しやうは、夢のうちのゆめ、たれか、はくねんのよはひを、たもたん。ばんじはみなむなし、いづれか、じやうちうの、おもひをなさん。

石川透A本

それ、こんしやうは、ゆめのうちのゆめ、たれか、百ねんのよはひを、たもたん。はんしは、みなむなし。

天理本

それ、一しやうは、ゆめのうちのゆめ、たれか、はくねんのよはひを、たもたん。万事はみなむなし、いつれか、しやうちうの、おもひをなさん。

このように、平仮名漢字の違い等はあるものの、冒頭はいずれもよく似ているのである。この類似は最後まで続くのであるが、末尾を列挙すると、以下の通りになる。

慶應大型本

これにつけても、わかき時は、さけをものみ、花をもみて、あくしんを、もつ事なかれ。

心にはわかのうら風をとつれてすかたによるおひの白なみ

水にうつる月、かゝみにみゆるかけは、又、みゆる事もやありなん。人けんのすかたを、うくる事は、一かんの亀の、ふほくに、あへるかことし。おしむへし、よくくことはりて、人もあはれみ、そねむ事なかれ。によにんのために、この物かたり、かきおくなり。

君かよは松の上葉にをく霜のつもりてよものかけそ久しき

慶應赤木本

これにつけても、わかき時は、さけものみ、花もみて、あくしん、おこすことなかれ。

心にはわかのうら風をとづれてすがたによる老のしら波

水にうつる月、かゝみに見ゆるかげは、又、見るなり。にんげんのすがたを、うくることは、一がんのかめ、ふほくに、あへるがごとし。おしむべしく。よくくことはりて、人をあはれみ、そねむことなかれ。女人のために、このものがたり、かきをくなり。

石川透 A 本

これにつけても、わかきときは、さけをものみ、はなをもみて、あくしんを、おこす事なかれ。

こゝろにはわかのうらかせをとつれてすかたによるおいのしらなみ

みつにうつる月、かゝみにみゆるかけは、又も、みるなり。にんげんのすかたを、うくる事は、一かんのかめ、ふほくに、あへるかことし。おしむへしく。よくく、ことはりて、人もあはれみ、そねみねたむ事なかれ。

女人は、つみふかきゆへ、女人しやうふつのために、きやうくをときをかれしを、みゝにふれなから、あくねんをつくる事、まよひのうへのまよひなり。

とりへのにこよひもけふりたつめりといひてなかめし人はいつらは

これも、あたる事を多ひせしなり。けふ ありて、あすしらす。たゝ一ねんに、ごしやうせんしよとねかふへし。

天理本

これにつけても、わかきときは、さけものみ、花をもみ、あくしんの御こゝろ、あるへからさる物語なり。

このように、諸伝本の末尾部分が特に異なっており、天理本は、それらの中では最も短い文章となっている。室町物語の諸作品においては、末尾のみが大きく異なることが、ときどき見られる。理由はそれぞれで異なっているが、一般的には、よりめでたさや幸福感を強調するため、宗教的な場合には、より信仰を深めさせるため、といったことが考えられる。

本文的には、第一系統、第二系統の違いというよりも、末尾の違いについて、今後の詳細な研究が進められるべきであろう。

ところで、『磯崎』の諸伝本は、多くが挿絵入りである。調べられる限りでは、第一系統では、最後の道成寺縁起の挿絵が存在しないことが多く、第二系統では、道成寺縁起の挿絵が存在する

ことが多い。この部分は、どの本も、演能の様子を踏まえていると考えられ、挿絵という観点からも、より深い研究ができる部分であるといえよう。

最後に、なぜ、『磯崎』には、横型奈良絵本が多いのかについて、触れておきたい。もちろん、軽々に論じられることではないが、少なくとも、絵巻の体裁を取っているのは、最古本として室町末期に遡るとされるデンバー本と、個人蔵の江戸前期三軸本くらいである。一方で、横型奈良絵本は、現段階でも十伝本ほど見つかっている。半紙縦型奈良絵本も若干あるが、いずれも江戸時代前期制作と考えられる作品群である。

絵巻と較べれば、横型奈良絵本は廉価であったはずである。その横型奈良絵本が多く作られているということは、おそらくは、購入者層が豪華な絵巻物群を求める人々とは異なっていたのであろう。多くの絵巻物が武家を中心に保管されていたことを考えると、江戸前期に台頭してきた裕福な町人達を考えるべきであらう。おそらくは、この『磯崎』の内容は、武家ではなく、町人に喜ばれた話だった可能性がある。

『磯崎』に限ることではないが、その作品の内容を誰が作成したかは、簡単には分からない。しかし、現在の伝存状況から、主に誰が購入したかは、このような作られた本としての形の偏りによって、考えることができるであらう。

(石川透)